拝啓　桜の便りも近づいて春の気配が一段と濃くなってまいりました。大変ご無沙汰いたしております。先生にはますますご精励、ご発展のこと何よりとお慶び申し上げます。

このたびは『忘れられた森田療法』の大著を由緒ある出版社の創元社から上梓されましたことお祝い申し上げます。加えて私のようなものにまでご恵贈賜りましたこと感激の極み、感謝の言葉もありません。ありがとうございました。

早速、手に取るももどかしく包みを解いて拝見いたしました。

まずメインタイトルの『忘れられた森田療法』に衝撃をうけました。これは“警世の書”ではないか！と予感がしたからです。巷間、森田療法の変質が伝えられ、その本質が等閑になってきたことが嘆かれている現実をみて、森田療法の歴史をたどり、本質を思い起こすのは今しかないと思われたからです。誠に時宜を得た出版と受けとめました。

全編を通じて、先生の森田療法に寄せられる深い愛着と、森田正馬への畏敬の念が行間から感じられ、高邁な学識にもかかわらず先生の謙虚な森田学者の姿を見る思いがしました。

単に精神医学のみならず、仏教をはじめとする宗教論、美術、文学、西洋哲学、歴史にまたがる広範囲の検証結果が、先生の膨大な読書量をうかがわせ、浅学なディレッタントの俗物の私には、眩いばかりの展開でした。

詳細は後日に譲るとしまして、一読して各論におよびますが、森田療法は本質的には実学であり、実生活での指標であり、教育や福祉の分野にも広がりを持ち、万人のものであるという基本的なお考えに全面的に賛成です。「森田療法にかじりついているものだけが宝物を持っている」のではなく、ひろく与えなければならないとのお言葉も、森田正馬の精神(「治った人は未だ治らぬ人にも法悦を分け与えねばならない」)にかなっていると思います。

第１章で「神経症は治さない」の項でマスコミや大学、製薬会社らが総がかりで「治したがり屋」をはびこらしている風潮を鋭く指摘されているのも医学者の良心からでしょうか。森田療法の衰退は神経質の変貌と社会の変化によるとしても、原法を踏み外しては森田療法の醍醐味が失われるとの指摘もうなずけます。最近の若手医師の志の低さ、不勉強も影響しています。

第３章の「人間　森田正馬」で死生観を述べておられますが、興味深く読みました。彼の反戦思想の根源を見た思いです。これは第５章の森田療法で自殺は防げるか、との問いにも通じるものと思います。

第４章の「生活の発見」を再発見するは、外部から見た「生活の発見」と「生活の発見会」論として大変貴重なものと思いました。文中、拙著をご引用下さって感動しましたが、顧みれば未成熟な作品で汗顔の至りです。

第５章は自殺と関連して森田療法や仏教思想を論じておいでですが、当代きっての仏教思想の大家でおいでの先生の独壇場と読みました。「生の欲望」と「死の恐怖」を根本に据える森田正馬の思想から、彼は自殺を否定していますが、高弟の高良武久先生は尊厳死の立場から肯定している（拙著『高良武久 森田療法完成への道』）のは興味深いエピソードかと思いました。また、真宗大谷派が戦前は「一殺多生」とこじつけて戦争肯定の立場をとっていたと書かれていますが、では原爆投下を肯定するのかと疑問が残ります。戦時中も竹中彰元という叛骨の師がいたことは一服の清涼剤を見る思いです。小生の友人の大谷派僧侶から送られてくる会報（月刊）では、終始一貫反戦であったと書いていますが、仏教に造詣の深い先生のご高見を伺いたいと思います。

第６章では森田療法と最近流行の認知行動療法（ＣＢＴ）との違いを明確にご指摘になっていることに共感を覚えました。最近、若手の森田療法家のＣＢＴ傾斜の傾向が目立ち、発見会の集談会でもしばしば話題になり、質問も受けますが、先生が「神経質的症状は異質なものとして排除しない」という森田の言葉を引用して、「症状除去に焦点を合わす」ＣＴＢとは本質的に異なるものとの立場をとっておいでになり「わが意を得た」感じがしました。

しかしＩＴ技術の急進展や、社会の労働事情をめぐる情勢のひっ迫感、先行き不透明感などで、神経症に加え生きつらさから、ともかく症状だけでも取り除きたいという患者の願望に、森田療法はどのように対応するのか課題も残ります。

第７章では森田療法と仏教の関係がのべられています。これも仏教思想に通暁されている先生ならではのご卓見と拝読しました。森田は「苦」と向き合う人間のために生きる知恵を仏教から探り出した、とありますが、確かに私たちが森田の著書や発見会の学習で耳にする禅の言葉や仏教的比喩は、森田療法をじつによく表現するのにピッタリ感があります。老子の「無為自然」や親鸞の「自然法爾」の自然思想が森田の「あるがまま」に溶け込んでいると理解できます。

最後に、森田療法の国際化(国際的普及)についても述べておいでになりますが、東洋特に中国での浸透に比べ欧米での評価や普及は未だ途上のようです。努力は続けられていますが、本気で欧米に伝えようとするならば、日本の「森田療法家が森田の原法の中にある本質を、知識の受け売りでなく、経験的に会得した者として伝える必要がある」とのご指摘は、森田学派の方たちへの”頂門の一針“となるでしょう。

長々と、門外漢の俗物が僭越にも先生の大著について、的はずれな感想、愚考をのべさせていただきましたご無礼をお許し下さい。発見会の各種会合でこの大著を皆さんにも紹介したいと存じます。

最後になりましたが、先生のますますのご発展と、森田療法の進化、普及を心から祈念いたします。

敬具

岸見宗善